

---

Fate/dark souls

アンバサ！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / d a r k   s o u l s

### 【Nコード】

N 3 3 7 3 Z

### 【作者名】

アンバサ！

### 【あらすじ】

闇の王。火の時代と呼ばれる、神々の時代を終わらせた不死の英雄。

なんの因果か、イレギュラーなマスターである雨生龍之介にサーヴァント召喚されてしまう。

イレギュラーなマスターと、イレギュラーなサーヴァント。両者の出会いから、運命は始まる

超更新不定期、フロム脳全壊。原作はこうで、これはこうじゃないとイヤ！ という方はおススメできません。

## F a t e / 始まり (前書き)

とりま上げてみるテスト。

## F a t e / 始まり

### 古い時代

世界はまだ分かたれず、霧に覆われ、灰色の岩と大樹と、朽ちぬ  
古竜ばかりがあつた

だが、いつか初めての火がおこり、火と共に差異がもたらされた

### 熱と冷たさ

### 生と死と

### 光と闇と

そして、闇より生まれ出でた幾匹かが、火に惹かれ、王のソウル  
を見出した

最初の死者、ニト

イザリスの魔女と、混沌の娘たち

太陽の光の王グウィンと、彼の騎士たち

そして誰も知らぬ小人

それらは王の力を得、古竜に戦いを挑んだ

グウィンの雷が、竜のウロコを貫き

魔女の炎は嵐となり

死の瘴気がニトによって解き放たれた

そしてウロコのない白竜、シースの裏切りによって、遂に古竜は  
敗れた

火の時代の始まりだ

だが、やがて火は消え、暗闇だけが残る

これは暗闇の王。

人の内よりいでし不死の英雄の 運命 Fate の物語。

冬木と呼ばれる地で、惨劇とも呼べる事件が起こっていた。  
場所はごくごく普通の四人の親子が暮らしていた一軒家。

しかし、今は見るも無残な有様になっていた。

部屋の隅にはズタズタに切り裂かれた四つの死体が転がり、フロ  
ーリングに鮮血を今もダクダクと流している。

そしてその鮮血を使い、刷毛でなにやら魔方陣のようなものを書  
いていく男がいた。

「うん、うん　今日のはうまく書き上がったなあ！」

程なくして完成した魔方陣を見て、満足げに頷く男。

染めてでもいるのだろうか？　オレンジ色の髪が特徴的な、中肉  
中背の20代の青年である。

いつそ優男とでもいえる容貌ではあるが、このようなことをして  
いる段階で、まともとはいえないだろう。

「でも坊やは殺さなくてもいけたかなあ？　一回書くのに失敗しな  
きゃなあ……」

一家四人を惨殺したこの男は雨生 龍之介。  
今世間を騒がしているシリアルキラーであり

「さあて、あ・と・は・ここをこうして……いよっし、完成！」

今は自称魔術師である。

というのも、三十人あまりの犠牲者を餌食にしてきた彼だったが、つい最近になって”モチベーションの低下”という由々しき事態に悩まされていたのだ。

そこで初心忘れべからずと、ひとつ原点に立ち返ろうと思い立った龍之介は、かれこれ五年ぶりになる実家に帰省をし、自らが最初に殺した実姉と対面した時まで遡る。

物言わぬ姉との対面は、しかし、これといった感慨ももたらさず、無駄足だったかと落胆した龍之介であったが、そのとき 家人にすら忘れ去られた蔵の奥に、一冊の朽ちかけた古書と、一つの一眼球・・・を見つけ出す。

眼球といっても、もちろん本物眼球ではない。龍之介には何の材質かは分からなかったが、大きさは大体大人の握り拳ぐらいだろうか、色は白眼にあたる部分が血の様な赤色の、なんとも不気味な球体である。

古書の方も虫食いだらけであり、凄まじく年季の入った本であったが、この眼球は更に歴史を感じさせる。たとえるならば、何万年もかけて形成された自然のように、人では及ばぬ圧倒的な時間を積み重ねた物。とでもいったところであろうか、自らも殺人を芸術とし、数々の作品を手掛けてきた龍之介であったが、その自信を木っ端微塵にするような存在感と威厳を醸し出していた。



落胆から一転、龍之介は飛び上がらんばかりに喜んだ。無駄足か  
と思っていたのが、最後の最後でこのような物に巡り合えたのだ。  
これを見ていればインスピレーションも湧くだろうと、嬉々として  
眼球拝借する。そして眼球の由来などが書かれていないかと、共に  
保管されていた古書を読みだしたところ、こちらもまた龍之介のイ  
ンスピレーションがむくむくと湧くような内容であったのである。

細い筆文字で、とりとめもなく書き綴られていたのは、妖術がど  
うのこうのという荒唐無稽な戯言だったのだ。

しかも伴天連がどうだのサタンがどうだとか、異世界の悪魔に人  
身御供を捧げて式神を呼び出し云々というのだから、もうまるつき  
り伝奇小説の世界である。

常人なら一笑に付すような内容だが、龍之介にとって本の信憑性  
など、もはやどうでもいい事柄であった。

流石自分のご先祖。中々にCOOLでFUNKYである。

自分もまた偉大なる先人に習おうと、早速古書にあった儀式を開  
始する”霊脈の地”とされる冬木の土地に拠点を移し、古書の記述  
の再現を行ったのである。

「いやあ〜いつも魔方陣を書くのに血が足りなくて失敗したけど、  
今回は多めに殺してよかったよかった。それでも一回失敗しちゃっ  
たしね」

これが都合四度目となる犯行であるが、その実今まで最後まで儀  
式をしたことは一度も無い。いつも肝心なところで血が切れ、その  
ままなし崩しに終わってしまうのだ。

なので今回は念には念を入れ、一世帯まるまる皆殺しにした訳な  
のだが……

やはり、儀式殺人という新たな殺害方法に夢中になっていた

とはいえ、考える程に愚行ではなかったのかと、龍之介は思えてならない。

やはり一家四人を惨殺。ともなれば、いよいよ警察も本腰をいれるであろうし、地域の住民の警戒心も段違いに増すだろう。

とりあえず、”霊脈の地”とやらに拘るのはこれで最後にしよう。最後であるし今回はいつもどこか適当に行っていた儀式もしっかり最後までやることにしよう。

そう龍之介は心に決め、例の赤い眼球を魔方阵の中央にポンと置く。

「確か触媒、を添える……だっけ、まあこれでいいよね？」

結局古書にはなんの由来も記されていないが、一緒に保管されていたし、これが触媒とやらだろうと当たりをつけ、今ではすっかりお気に入りの眼球を置いて準備は整った。

これでサタンだか式神だか分からないが、よくわからないモノを召喚するシチュエーションは出来上がったわけである。

感慨と共に、儀式を仕上げるため、古書に書かれていた呪文らしきものを龍之介は詠唱する。

「閉じよ（みたせ）。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに四度 あれ、五度？

えーと、ただ満たされるトキをー破却する……だよなあ？ うん。  
あーコホン」

もちろん龍之介も悪魔やら式神とやらが存在するとは本気で思っ

ていない。だが、あの異様な存在感を持つ眼球の存在が、もしかしたらと思わせるだけの説得力を持っていた。

故に雰囲気作りも兼ね、真面目に詠唱する。龍之介の目的はすなわち、死を理解すること。そのために内心バカっぽいとも思っているが、悪魔とやらよびだせる呪文を真面目に詠唱する。

「ッ!? 告げる」

すると、不意に右手に走る鈍い痛み。それも生半可ではない痛みが一瞬だけ走り、痺れるような余韻を残す。

思わず詠唱をやめて右手を見ようとしたが、龍之介の意志とは裏腹に、龍之介の口は何か急に急かされるかのように詠唱を続ける。

「告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

詠唱を続けながら右手を見る。どういうわけか、そこにはいつの間にか刻んだ覚えがまったくない入れ墨のような紋章が浮かび上がっていた。トライバルのタトゥーのような、三匹の蛇が絡み合うような紋章である。

内心なかなか洒落ているなあと考えつつ、いよいよ本物かと期待が高まっていく。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者」

更に異変は起きる。

床に描かれた鮮血の魔方陣。それがいつしか燐光を放って龍之介を照らし、閉め切っていたはずの部屋に風が湧き上がる。

風はみるみる大きくなり、風は旋風へ、旋風は突風へと変わっていき、もはや立っていることすら危ういほどである。

更に魔方陣の燐光は輝きを増し、魔方陣の中央には霧状のものが立ち上がり、その中で小さな稲妻が火花を散らす。

龍之介は確信した。

これは本物である。夢でも幻でもない。

やはりあの赤い眼球は本物であり、自分は常識という一線を越え、まだ見ぬ未知の領域に一步踏み出し、新たな死を理解できると確信した。

そして最後の詠唱を唱える      ツ！

「汝三大の言霊を纏う七天！

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ      ！！」

閃光。そして轟音。

と同時に、龍之介の体を衝撃が駆け抜ける。それは龍之介の体を

高圧電流で灼くようであつた。

これは龍之介が知る由もないが、かつて雨生の一族に伝えられていた異形の力。今は忘れ去られ、それでもなお連綿と受け継がれてきた血によつて、今日まで眠り続けてきた『魔術回路』という神秘の遺産が、今まさにこの儀式を通して目覚めたのだ。

そして龍之介に流入した”外なる力”は開いたばかりの回路を循環し、再び外部へと流れ出で、異界へと招かれし者へと吸い込まれていく。

『<sup>オレ</sup>己は問う』

立ちこめる靄の中から、凜としたよく通る誰何の声が聞こえる。

いつしか耳障りな風は止んでいた。龍之介が目を開けると、光を放っていた魔方陣の輝きも消え、陣を描いていた一家四人分の鮮血は、まるで焼け焦げたかのように黒ずみ、干からびている。そして薄れゆく靄の中、再び声が聞こえた。

『<sup>ク</sup>汝が己を招きしマスターか』

これがFateの始まり。

**F a t e / 始まり（後書き）**

ぐだぐだになったらゴメンヨ。

## 始まりの終り（前書き）

よっこいせと。

のんびり投稿ー

……ところで、**ダークソウル**ってみんなしってるのかな？



## 始まりの終り

「貴様が己<sup>オレ</sup>を招きしマスターか」

理知的な低い声。

立ちこめる靄の中から、龍之介に声がかけられる。

しかしその声の主の姿は、巷で連続殺人鬼と恐れられる龍之介でさえ敬遠してしまうような姿であった。

まず目につくのは髑髏の面と、それを覆うフード。その面は本物の骸骨のように見えるせいか、半ば顔と一体化しているようにも見える。

死神のような面貌だが、面からは僅かに灰色の瞳と肌らしきものが見て取れ、かろうじて人であると分かった。

体格はかなり大柄で、龍之介より頭一つ分は高いだろうか。筋骨隆々……とまではいかないが、筋肉を無駄に膨らませるのではなく、動きを阻害しないように抑えてかなり鍛えられているように見える。

その体に纏っているのは、光沢の無い黒を基調とした鋼の鎧だ。スリムなシルエットに、体幹の要所に骨をモチーフとした装甲が付けられており、さながら骸骨の騎士のように龍之介は見えた。

そのおおよそ現代に生きる者達とは縁の無い鎧。相当着こまれているのか、ところどころ汚れ、擦り切れている。

しかし何より龍之介には一臭う・・・。

龍之介の鼻をくすぐるのは血だ。血の臭い。鉄の臭く、人に流れる赤き血潮。

その血の臭いがこの男を中心にじんわりと広がっている。

よく見れば、黒い鎧なので分かりづらいが、鎧のあちこちが若干鎧が赤ずんでいるのが分かった。

鋼である鎧に染みつくまで血を浴びたとしてもいうのだろうか？

龍之介とて人を殺し、返り血を浴びている。

が、いったいどれほどの返り血を浴びればあなるのか……おそらく百では足りない。千か、それとも万だろうか？ もはや龍之介の想像の埒外であった。

そして極めつけは、腰に吊るしてある一本の剣。

鞘に収まっているので刀身は見えないし、剣の良し悪しなど専門家でもないので分からない。

鎧と同じく、闇に溶け込むような黒一色の剣。その剣の事など、龍之介はまったく覚えもなかったし、知りもしなかった。

だけど、目が離せない。

体はまるで石になったかのように動かず、龍之介は目だけでじつと剣を見続ける。

人は百円のカッターナイフでも、一発で一億円するミサイルであろうとも人は等しく死ぬ。

故に、人を殺すのに大した道具はいらない。今まで龍之介はそう思っていたし、事実そうだった。

しかしそれがどうだ？ 人を害することのみを考えて作られ、素人目にも分かる歴戦の戦士が使用し、血を浴び続けたであろう剣。なんとという威厳！ なんとという風格！

刃を向けられたわけでもないのに龍之介は死の予感を得る。死を感じ、生を実感する。

まさしく龍之介の求めていた未知なるモノ。確実に自分より死に

触れ、死を理解しているであろう存在。

見れば見るほど、考えれば考えるほどに、聞きたいことが山のように出てくる。

今まで何人殺したんだ？ 一体どんな殺し方がすきなんだろう？

その剣を見せてくれ。

話を聞けるかも知れない。そう思うと、龍之介は何とも楽しい気分になった。

先祖の残した謎の儀式。それは龍之介に久しく感じていなかった熱き滾りを思い出させ、その滾りに身を任せるように眼前の男の質問に答える。

「よくわかんねえけど、オレがアンタを呼んだ！

なあなあなあ！ アンタは悪魔か、それとも式神ってやつか！？」

「これはなんとも……当たりを引いたかな？」

そんな興奮気味の龍之介を見、髑髏面の男は楽しげな口調で自分が何者かを語り始める。

そう。聖杯戦争について。

それは龍之介にとって夢のような話だった。

「聖杯戦争」

「それは万物の願いをかなえる願望機である「聖杯」を奪い合う争い」

「聖杯を求める七人のマスターと、彼らと契約した七騎の英霊すなわちサーヴァント。

剣士セイバー。

弓兵アーチャー。

槍兵ランサー。

騎兵ライダー。

魔術師キャスター。

狂戦士バーサーカー。

そして暗殺者アサシン」

「七つのクラスにて現界する英雄達。それらが殺しあい、最後の一人が聖杯を手にする殺しあい。

そして己はその中の魔術師キャスターであり、貴公は己を招いたこの戦争のマスターというわけだ。

理解したか、マスター？」

そう言っただけで締めくくり、龍之介の顔を覗き込むようにズイッと髑髏の面を近づける男　いや、キャスター。

突然のこんな話をされ、即座に信じるような奴は頭がいかにしているといってもいいだろう。

しかし龍之介は世間一般で、頭がいかにしているとされる連続通り魔である。

更に、目の前で雷が落ち、髑髏面の男が急に現れたり、状況証拠も揃っており、龍之介は簡単に信じた。

「旦那みたいなのが七人で殺しあい？　マジかよ……」

目の前の圧倒的な死の気配を振りまく男、キャスター。それと同じような存在が七人でバトルロワイヤルをする。

きっと皆キャスターと同じように甘美なほど危険な臭いを振りまき、龍之介には想像もできないような殺し合いをするのだろう。

なんて、なんて面白そうなんだ……っ！！

常人なら忌避する殺し合い。しかし龍之介にとってそれは最高の娯楽である。

もともと一家四人を惨殺し気分が昂っていた龍之介だが、今のキャスターと名乗る男の話にますます興奮していく。

「ツ~~~~~COOL!!」

最ッ高オオオオに、COOLじゃないか!!」

殺人鬼・雨生龍之介は、この退屈な世界の中で、初めて心から興奮していた。

目の前の男のような常識から外れた存在。それが全力で行う殺し合い。

英雄達が、己が人生で培ったモノを武器に鎬を削り合う戦い。言わば英雄同志の互いの人生の比べあいである。

歴史に名を残す既に死んだ者達。それらが時を超え、国を超え、本来ならあり得ない組み合わせで互いの人生を比べあう。死を理解したい龍之介にとって正に打ってつけである。

そして、この殺し合いは普通の人間は知ることすらできないものであり。それを知り、更には参加できる優越感。

人を超えた英雄達の殺しの絶技。それらを見られるかと思うと、もはや龍之介は居ても立っても居られず、キヤスターに詰めかかる。

「オーケイだ！　ともかくオレは旦那に付いていく！　何なりと手伝うぜ。」

そうと決まればすぐに行こう！　最っ高にCOOLな殺し合いをオレに魅せてくれ！」

興奮しすぎて血走った両眼は爛々と輝き、呼吸も荒い龍之介。

龍之介はすぐさま他の参加者を探しに行こうとしていが、キヤスターがそれを遮るように話しかける。

「まで。まだ貴様の名を聞いておらん。これでは契約を結んだとはいえぬ」

言われると、今更ながらまだ龍之介は自分の名を名乗っていないことに気付く。

確かにこれはいけない。これから楽しい楽しい殺し合いを共に参加するというのに、お互いの名前すら知らない。なんとも恰好がつかないではないか。

それに名と聞いて此处で龍之介にふと、一つの疑問がわいた。そ

ういえばこの男、キャスターはどのような英雄なのだろう？ 魔術師の英雄。と言われても、いまいち龍之介にはピンとこない。一体どこで生まれ、何をした英雄なのだろうか、龍之介は気になってしかたがない。

キャスターは、そんな龍之介の疑念にコクリと頷き、大仰に両手を広げ名乗りを上げる。

「まず、己が改めて名乗ろう。

己はこたびの聖杯戦争で、キャスターのクラスで召喚されたそうさな、”ライ”。とても呼んでくれ」

ライ。龍之介はその名を数回確かめるように呟く。  
しかし残念ながら、龍之介はそのような名前の英雄に心当たりはなかった。

目の前の自分よりも殺しに長けた男の事を知らないというのは残念ではあったが、知っている人物より、知らない人物の方がこれからの楽しみが増えるだろうと考え、笑顔で龍之介も名乗り返す。

「ライ……ライの旦那だな！

オレは雨生龍之介っす！ 職業フリーター。趣味は人殺し全般！  
最近は基本に戻って剃刀を使ってみました、今度はもっとデカい刃物で殺ってみたいです！

さあ旦那、まずは誰から殺す？ なにをしたらいい？ オレ、楽しみで待ちきれねえよ！」

話している途中で、再び興奮してきた龍之介。

龍之介は伝説の英雄達の殺しあいに参加できるほど自惚れてはいないが、恐らく一生で最初で最後の英雄達の殺し合いである。

それを見ているだけというのも味気ない。折角参加できたのだし、なにか出来ることはないかと問いかけた。

そんな龍之介に気を良くしたのか。心なしか、先ほどより上ずった声でキャスターは言う。

「ああ、あるぞ。龍之介、貴様にしかできんことだ。なに、やること自体は簡単だ。貴様は己にただ一言。

”自由にしろ”

そう言えばいい。そうすれば己は更なる力を得る」

しかしこれは本来絶対に言うてはいけない事。

英霊は本来龍之介はおるか、並の魔術師には従える事さえできない上位存在。

それをずぶの素人である龍之介が従えられているのは、聖杯からマスターに与えられる、自らのサーヴァントに対する3つの絶対命令権である令呪のお陰だ。

この令呪と、魔術師がサーヴァント現界の為の魔力。これがあるからサーヴァントはマスターを裏切らない。

裏切れば令呪で律されて動きが鈍り、戦闘に支障がでてしまう。

よしんばマスターを殺せたとしても、単独行動のスキルを持たない限り、直ぐに現界出来なくなる。

しかし、龍之介は素人。魔術の魔の字すら知らない、魔術回路を持つだけの男である。もちろん令呪が何かすら知らない。

結果。龍之介は特に疑問を持つ事も無く、その程度で殺し合いが見れるというのならばと、龍之介は深く考えずにライの言うとおり言ってしまう。

「よーっし、旦那！」自由にな」やっちゃってください！」

クハッと、キャスターがハッキリと嗤う。

愉快で愉快で仕方がないと言わんばかりに嗤い、





「痛ゝゝ、痛ゝゝ、よっ！　なんで……なんで!？」

支えである両足を失った龍之介は、自らの血だまりに倒れこみながらも問う。

一方的とはいえ、尊敬を抱いていた相手に裏切られたのだ。その疑問も当然である。

対して、表情は相変わらず仮面で読めないが、ライは龍之介の四肢を叩き斬った後悔はまるで伺えない。

「なぜかだと？　可笑しなことを聞く。

言っただではないか、”自由にしろ”……とな。

だから自由にしたのだよ」

数度血振りを済ませ、再び腰に納刀しながらそんなことをのたまう。

「本当はその首を刎ねてやりたいのだがな、それでは己が現界できん。

なれば令呪を奪う序にその四肢を斬り落としただけだ……な？　なんの問題もあるまい？」

言いながら、血だまりに落ちている龍之介の右手を拾う。

令呪、と言われても龍之介には訳が分からない。そう言いたかったが、血を流し過ぎてもはや喋ることすら困難であった。

他人から令呪を剥奪することも可能ではある。ただしそれには、強引な手段が伴う。

心霊医術の類で剥奪自体は可能だが、令呪はマスターの魔術回路に根付いているので、剥ぎ取られる側のマスターは深刻なダメージを受けてしまい、唯でさえ少ない龍之介の魔力供給が覚束なくなる

可能性がある。

そこで令呪の刻まれた手を切り落とし、マスターの魔術回路との接続を断ったのだ。

「安心しろ。ちゃんと止血してやる。

さて、もう寝ろ。起きたら全て終わっている……全てな」

そう続けながら倒れる龍之介に近づくライ。

龍之介は痛みのショックと出血でもはや意識は朦朧としており、その言葉すらほとんど聞こえていなかった。

ただ自分から流れる血と、忍びよる死の気配を感じて唯笑う。

（なんだよお……こんなところにあつたのかよお……）

自らの探し求めていた死への理解。

まさかこんな所にあつたとは龍之介は思いもしなかったのだ。

（神様ってやつぁ……意地が悪りいやぁ……灯台もと暗しってやつかよお）

「よい夢を。マスター」

意識を失つても、最後まで龍之介の顔は恐怖ではなく、愉悦で彩られていた。

己を召喚したマスター、龍之介。

その頭を無骨なガントレットでライは掴む。すると、右手が何の前触れもなく一燃えた・・・。

しかもただの炎ではない、普通ではありえない闇色の火。

そしてその炎に包まれた右手に、龍之介から黒いナニカが吸い込まれていく。

それこそ人間が人間として生きる為の”人間性”である。

煌々と燃えるその腕、名を”ダークハンド”。他者の奪う吸精の業であり、魂の狩人、ダークレイスたちの業。ライと呼ばれるこの男の片鱗。

触れれば人間性溢れる聖人とて一度にすべてを奪い取り、墮落させ自我を奪う魔の黒手。

いまや達磨となった龍之介から、限界ギリギリまで人間性を吸い

取るライ。

（随分と人間性を持っているな……余程人間らしく生きてきたようだな）

人間らしさとは何もない事ばかりでは無い。人を殺すこともまた人間らしさなのだ。

その点。自身の快楽の為に幾人も殺人を犯した龍之介は、とても人間らしいと言えるだろう。もっとも、それももう終わりではあるが。

「こんなものか……」

龍之介から手を離し、そのまま血赤の苔玉と言われる道具で止血をしていくライ。

マスターの自由を奪うためとはいえ、少々派手にやりすぎたかと自省する。

本来なら、殺人鬼などすぐさま殺してやりたいところではあったが、それでは聖杯戦争に支障が出てしまう。

故に、身を縛る絶対命令権である令呪。それを奪うついでに四肢を斬り落とし、ダークハンドによって自意識を奪ったのだ。

己を召喚したマスターが何の知識も持っていない素人でよかったそうライは思う。

これが熟練の魔術師ならば、いかに令呪で縛られているとはいえサーヴァントに自由を与えることなどあり得ない。

龍之介が素人であったおかげで、”自由にする”という言葉質を容易く得ることができた。

しかしそのかわりに、素人がマスターのお陰で、随分と弱体化してしまった。まだ挽回は可能だろう、戦況が厳しい事には変わりはない。

「それにしても聖杯戦争か……」

なんと数奇な人生だろうか、ライは皮肉気に笑う。  
生前、幼いころからライは変人扱いされてきた。

理由は簡単。記憶があつたからである。

記憶。

鉄の箱が異様に整備された道を走り、天を衝くような塔が無数に並ぶ。そんな荒唐無稽な記憶だ。

口がきけるようになって直ぐに奇妙な言葉を喋り、そのくせ頭だけは異様にいい子供。

不気味ではあったが、それだけならよかった。”ダークリング”が浮かび上がるまでは。

齢18にて浮かび上がった紋様、ダークリング。それは不死人の証。

ライが生まれた世界では不死者は害をなす者。殺しても何度でも甦り、更に死に過ぎればいずれ考える器官が壊れ、見境なく人を襲う真正の化け物。

故に断崖絶壁の監獄である北の不死院に、世界が終るその時まで入れられる。

しかし、ごく稀に現れる使命を持った不死人。それらは不死院を出、古き王の地であり、巡礼の地ロードランに渡る。

そしてライもまた選ばれ、ロードランに渡り使命を果たしたのだ。

なんという話だ。まるで、

「まるで陳腐な物語じゃないか」

自分の事ながらライは呵々と笑う。

生前に敵を殺して殺して殺して殺しまくり、そして死後は再び戦

争である。

一体どれだけ殺せばいいのだとライは笑う。  
だが、

「これで叶う！」

不死人になってから、ライにはずっと考えていたことがある。  
自らの荒唐無稽な記憶。その真偽を確かめ、その場所に行くことだ。

そして聖杯から与えられた現代の知識。その中には鉄の箱、天を衝く塔。それらに関する情報が全てが入っていた。

これが笑わずにいられようか？  
自らが望んだ事が、呼び出された時から半ば叶っているのだ。  
ならばライのやることは唯一つである。

「ならば、殺そう。」

不死人を　竜を　神を殺したように、全てを殺そう」

刈って、狩って、克って、勝つのだ。この戦争に。

英雄？

それがどうした。

怪物？

殺し飽きたぞ。

竜殺し？

己もそうだ。

不死身？

己は不死狩りだ。

如何なる相手、如何なる敵であろうとも意志を貫く。

それこそがライの真骨頂。

生き残るという一心で、遂には神をも打倒した男。

目標を達するには聖杯を手に入れなければならない。  
ならば、

「 勝つぞ……！」



此処に七人の英霊が出そろった。  
時は来た。

今より、聖杯戦争を開催する  
！

## 始まりの終り（後書き）

龍之介ファンの人ごめんよ（・・）  
うん、これで退場なんだ。

三人称むずいなー  
てか、改稿にどれだけ時間かけるんだよw  
てことで、感想まってるおゝ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3373z/>

---

Fate/dark souls

2011年12月25日16時49分発行